

# 山室静とタゴール

Yamamuro Shizuka's View of Rabindranath Tagore

大 沼 郁 子  
Ikuko ONUMA TASHO

日本女子大学大学院紀要  
家政学研究科・人間生活学研究科  
第 24 号

## 山室静とタゴール

Yamamuro Shizuka's View of Rabindranath Tagore

大沼郁子\*

Ikuko ONUMA TASHO

**Abstract** The literary activities of Yamamuro Shizuka (1906–2000) are diverse. Yamamuro Shizuka reviewed modern Japanese literature, translated that literature into English, researched and created English translations of the myths central to Northern Europe, and created works of poetry and fiction. Another of his literary activities was his “Tagore Study.” He stated in his biography that Tagore not only incorporated European elements, but also combined Indian and Oriental traditions, working as a humanist. However, Tagore was silenced in Japan for his outspoken criticism of Japan’s entry into the Greater East Asia Co-prosperity sphere. It was in this period and within this atmosphere that Yamamuro introduced Tagore’s work, translating and providing criticism of his works. In this paper, I would like to look at Tagore from Yamamuro’s perspective.

**Key words:** Yamamuro Shizuka 山室静, Rabindranath Tagore タゴール

### はじめに

山室静（1906–2000）の文学活動は多岐にわたる。日本の近代文学への評論や英文学の翻訳、北欧を中心とする神話の研究や翻訳活動を通して多くの作品を日本に紹介してきた。

アンデルセンや「ムーミン」をはじめとする北欧の童話の翻訳は、日本における児童文学の幅を広げたとと言えるであろう。

山室のもう一つの文学活動に「タゴール研究」があげられる。山室静のもとで学んだ一人、インド児童文学の会代表の鈴木千歳は、山室が1943年に『タゴール詩集』を刊行後、伝記なども含めて、タゴール作品リストのほとんどに山室静の訳が見られることを踏まえ、英語からの翻訳だったにせよ山室が「（日本の）子どもたちに何とか敬愛するタゴールの文学を紹介しようと努める熱意が伝わる」<sup>1)</sup>と述べる。

山室は、1965年『真理の旅人 5–20世紀を動か

した人々』（講談社）の編集を担当した際、キルケゴール、シュヴァイツァー、ブーバー、内村鑑三とキリスト教的西欧の伝統に立った4人に加えてタゴールを取り上げた。

その序文で「（タゴールも）かなりヨーロッパ的なものを採り入れているが、他方であくまで東洋・インドの伝統にたつて、それとこれとの結合の上に、少なくともみごとな調和的人格を実現し、豊かな芸術を花ひらかせると共に、幅広いヒューマニストとしての活動を示した。新しい人類の教師として、この人はもっともっと注目される必要があるだろう」という理由からタゴールを選択したことを述べている<sup>2)</sup>。山室は『タゴールの生涯』を綴りながら、「タゴールが真理の旅人というよりも、むしろ真理或いは生命の体現者といった趣きがある。この混沌と苦悩の時代に、これこそまさに驚くべきことではないか」と、そのヒューマニズムを讃える<sup>3)</sup>。また、詩人でもあった山室が、タゴールのすぐれた文学性に対して、魅力を感じていたのはもちろんだが、なにより山室はタゴールの童話の質の高さに注目していた。さらに山室は、政治や教育にまで及んでいたタゴールの活動に魅かれた。

\* 学術研究員  
Researcher

本稿では、山室静がタゴールをどのように評してきたかを見るとともに、タゴールの存在が、山室自身の生き方にどう関わってきたのかも見ていきたい。

## 1. ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941) の生涯

### ①家系

80年にわたるタゴールの生涯は英国支配確立による祖国インドの激動の90年と重なる。その時期はヒンズー教と回教が混在していたのに加え、キリスト教が入るという思想的にも混沌とした頃でもあった。

タゴール家は紀元8世紀から続くベンガルの名家で、バラモンとして高い尊敬を受けていた。厳しいカースト制度のインドの社会の中であって、タゴール家の先祖は、新しい制度や思想を受け入れる進取の気風を持っていた。祖父ドワルカナートの頃がタゴール家の全盛期で、藍工場や商船隊を持っており貿易を通して大きな富を得ていた。インド最初の近代銀行ユニオンバンクを設立し、海外への渡航によってヨーロッパの学問・文化を取り入れた。ヒンズー大学やカルカッタ国民図書館などは、この祖父の援助によって設立された。しかし、外面的には西洋化の生活を送る一方、タゴール家の家庭は極めて古いヒンズー式だった。父・デベンドラナートはこうした生き方を嫌悪し、隠者的な生き方を望みながらも、地主としては有能な経営者だった。彼は自然の美と神秘の中に神を見るヒンズー精神に生きた。詩人ラビンドラナート・タゴールは、この父の14番目の子として生まれた。15番目は生後すぐ死亡しているため、事実上の末子である。

### ②タゴールの少年時代

タゴールは兄たちに比べてぱっとしない。美少年でもない。甘ったれた性格だったため、正規の学校はすべて途中で止めた。山室は語っている。勉強が出来なかったわけではなく、読書家で勉強も好きだったが、外から押しつけられる勉強が嫌いだったと言う。山室が、タゴール伝記で強調しているのは、こうした点である<sup>4)</sup>。『アンデルセンの生涯』(新潮選書 1975年)においても、アンデルセンの少年時代の弱さや劣等感に注目して書いているが<sup>5)</sup>、

そうした幼少・少年時代のコンプレックスについて、詳細に描く山室静の姿勢はタゴールの伝記にも見られる。

一方で、少年時代のタゴールは、自然を愛し、美しい言葉に敏感であったという。家庭教師による授業の中で、美しいフレーズに出会うと、身体を震わすほど感動し、自らも簡単なリズムを持った詩を創作するようになった。やがて下男に『ラーマーヤナ』の詩を暗唱させて聞いたりするうちに、14聯の詩を作るようになった。家庭教師による授業の他に、父親に英語とサンスクリット語を習ったり、身体を鍛えるためレスリングの訓練もしていた。

長兄ドヴィジェンドラナートや哲学者・数学者、次兄サチェンドラはサンスクリット学者でその妻はインド最初の児童雑誌『バラカ』を創刊した。12歳年上の五兄ジョティンドロナートも美貌で音楽的才能があり、ビジネスや政治にも関心を持っていた。何よりタゴールより二つ年上で、15歳で嫁いできた兄嫁のカドンボリ・デビ(カドムバリ)は、特別な存在だった。しかしタゴールが22歳の時に結婚した直後、この兄嫁は謎の自殺を遂げている。

山室は、この兄嫁の自死の後に書いた『滝の目ざめ』という詩が、タゴールの美と神秘の世界への開眼ではないか、と見ている<sup>6)</sup>。つまり、タゴールが汎神論的世界観に支えられた美しい統一と、調和と充実のある作品を書く詩人となるきっかけとなった。

### ③政治活動から教育へ

タゴールの詩集『クシャニカ』では、軽薄な西欧模倣と西欧文明に対する懐疑と不満を表した。この詩集のタイトルそのものが「一時的なもの」を意味し、資本主義がもたらした害悪への批判をするものであった。

1901年から、タゴールは、自分の子どもを含めた5人の子どもを集めて野外学校を設立する。この学校は、後にヴィスヴァ・バラティ大学へと成長する。

タゴールが子ども時代に嫌悪した規則ずくめの教育は、知育偏重の西欧風システムであったが、この野外学校は「インドの古い森の学校」であった。隠者と弟子たちとが一緒に住み、行住坐臥の伝統を復活させ、五官を通して外界を感じる、自然の中での教育をめざした。後述するが、このタゴールの学校とそこでの教育方針は、山室が戦後まもなく設立し

た学校「高原学舎」の理念と同一である。これは山室の人生に影響を及ぼしたタゴールの一側面と言えるだろう。

この森の学校の設立にあたっては、財政面では妻が最大の協力者で、嫁入りの際の貴金属を売り払うなどして資金を工面した。しかし、その妻を病気で失った後、次女、愛弟子、父親と立て続けに身内の死を体験する。この孤独の中でタゴールは、いっさいの政治運動や社会的活動を捨て、宗教的瞑想の中で過ごすようになる。そうした状況で創られたのが『渡し船』（1906）であった。此岸から彼岸への過渡を象徴したこの詩風が、『ギタンジャリ』（ギターンジャリ）へとつながっていく。

#### ④ノーベル賞受賞

こうした身内の死の悲しみから外遊をしようとするが、タゴール自身の体調が思わしくなく、ドクターストップで引きこもることになってしまった。この時期、姪の勧めで『ギタンジャリ』を英訳することになる。それが偶然インドを訪れた画家ローセンスタインと交友を結ぶことで、イェーツ（William Butler Yeats 1865-1939）へと紹介され、タゴールの詩作品が世界に広まるきっかけとなったのである。1910年、詩集『ギタンジャリ』を刊行、1912年にこの英訳をイギリスで発表し賞賛を博した。翌1913年、東洋で初めてのノーベル文学賞受賞となった。

しかし世間の興奮をよそにタゴールは淡々として受けとめ、「こうした人たちは私がうけた名誉を尊敬しているのであって、私自身をではないのです」と冷静に状況を見つめて書いている。カルカッタの名士が発起した祝賀会も拒絶したという<sup>7)</sup>。しかし、タゴールの秘書で後にタゴールについての著書を執筆したクリパラニは、タゴールのノーベル賞受賞は「西欧の知性の上に、アジアの〈心〉が生きており、単に博物館の中に見本としてでなく一つの生きた実在物と見られるべきものであることを、はじめてまざまざと印象づけ」、さらに「アジアの無視された人間性と、その潜在的な回生力に対する西欧の認識の象徴」<sup>8)</sup>となったとその価値を強調する。

#### ⑤ガンディーとの友情と対立

タゴールと同時代のインドで活躍したのは、非暴力を唱えたガンディー（Mohandas Karamchand Gandhi 1869-1948）であった。二人は交流を持って

いた時期があり、それぞれに共通する理念と、互いに相容れない思想を持っていた。

まず、タゴールとガンディーの共通点であるが、第一次世界大戦に対して強い憂慮をしていた。ともに平和を重視する二人は、痛恨の想いでこの大きな戦争を捉え、批判的な思いでいた。その反面、対立した点もある。タゴールはカースト制度を非難しながら、彼の学校では身分違いの生徒が異なるテーブルで食事をしていた。ガンディーはその身分差別を批判したが、タゴールは学生に強制してはいるわけではないと答えた。こうしたあり方が、学生たちにとって自然なのだと反論した。一方、タゴールはガンディーの非暴力の指導を受けていた民衆が、1919年のローラット法（イギリスによる弾圧）に対し、暴徒と化したのを結局は暴力による解決ではないか、と非難した。

## 2. タゴールの日本での受容

日本におけるタゴール受容の在り方を辿ると、大きな波は2回あったと見るができる。ノーベル賞受賞直後（1913）と、日本への来遊の時（1916）である。

日本においてタゴールは、1913年のノーベル文学賞を機に広まったと言えよう。堀まどかは、「第一次世界大戦の前後には、従来の西洋中心主義の世界観が大きく揺り動かされた」時期のタゴールのノーベル賞の受賞は非ヨーロッパの持つ可能性を押し出した「まさに象徴」と述べる。また、タゴールの「西洋近代文明への批判は、時代の要請に沿い、時代風潮に合ったものであった」<sup>9)</sup>と見ている。タゴールと個人的な付き合いもあった詩人の野口米次郎（1875-1947）は、タゴールを理智によって論じるのではなく、「情調の力がないと、彼の詩的秘宝を開くことができない」とし、タゴールの価値は「人間性と宇宙との関係を適確に見ることが出来た点にある」<sup>10)</sup>と評している。一方、岩野泡鳴は『読売新聞』に掲載した「タゴール氏に直言す（上・下）」（1916年6月16日と17日）に続き、「現今の日本の如き独立発展国に來たつて、亡国の印度を標準にした思想を以つて、物質的文明の否定をするだけでも飛んでもない見当違いであるのに、タゴール氏は一層無洞察」<sup>11)</sup>と批判し、タゴールに同調、賞賛

する日本人にたいしても「無洞察な追従」と切り捨てた。

このようにタゴールに向けられた批判は、言葉で表現される詩や文学性よりもまず、タゴールの作品に見る汎心的思想に注目がなされている。

山室静がタゴールに触れたのはこの時期であった。山室が旧制中学の3、4年の時で、国語副読本に「チャンパの花」と「紙の舟」が掲載されており、それを読んだのがきっかけだったという。ノーベル文学賞を受賞したことや、その後、タゴールが日本へ来遊の際、「東方の詩聖来る」と話題になっていたが、山室はそうした世間の名声に関わりなく、タゴールの詩に惹かれたようである。後に山室は、「長い貧乏と彷徨の間にも、始終私は氏の著作に親しんだ」<sup>12)</sup>と、タゴールが自分自身の人生に大きく関わっていることを述懐している。

1916年は、タゴールが来日したこともあり、第二次「タゴール・ブーム」が起きるが、以前からの批判も引き継がれる。東大講演の後、井上哲次郎(1855-1944)は「唯だ氏の云う所はどうやら科学を呪う様に聞こゆる所がある。…寧ろ印度の森林生活を喜ぶ人のように思われる」と「時勢と逆行」「亡国」<sup>13)</sup>と批判した。その他、正宗白鳥、久米正雄、夏目漱石、与謝野晶子などは「読んでいないので、何とも言えない」<sup>14)</sup>と無関心であるという姿勢を示した。

こうした日本側の姿勢の背景には、第1次世界大戦の渦中であって、西洋を目指し追いつこうとしてきた日本にとって、タゴールが西洋文明批判したことにあると考えられる。当時の日本はタゴールのように「西洋文明」をさまざまな角度から見当する態度は希薄だったようである。

タゴールは、満州事変(1931)で、日本が中国を侵略し始めたことを展開したことを厳しく批判する。日本の帝国主義政策はタゴールが「愛する日本の美しい伝統への裏切りである」と痛切に批判した。これをきっかけに日本の友人らとも絶縁することとなり、日本では完全に黙殺されるようになってしまった。

日本でのタゴール評価は、東洋人としての汎神論的思想に新しさが無いというものであり、ノーベル文学賞によって話題になり、満州事変後はその文学

的価値には関係なく黙殺されたということになる。山室はこうした社会の状況下で1943年に河出書房から『タゴール詩集』を刊行したのである。この刊行について山室はこう書いている。「日本が中国を侵略し、いわゆる大東亜戦争を引き起こすにおよんで、タゴールは手きびしく日本の行き方を批判糾弾するようになりました。このため、一時はタゴールは日本とは縁がきれたようになってしまいました。/そんな状態に窓をあけるために、戦争中に私はあえて『タゴール詩集』を訳し、戦後はまた友人たちと『タゴール著作集』を出したり、タゴール生誕百年記念祭を行なったりしてきたのを一つの誇りに思っています」<sup>15)</sup>。

山室には日本批判を行なったタゴールの作品に高い文学的価値を認め、正統に評価したいという強い思いがあったものと思われる。この時期に確固たる信念を貫くべくタゴールの詩集を刊行したことは非常に重い意味を持つだろう。

### 3. タゴールの日本観

1916年、タゴールは、朝日新聞などからの招待により来日している。

「日本への旅」の中でタゴールは、「(日本人は)嘆きにも悲しみにも苦痛にも興奮にも、自分をいかに制御するかを知っている。それが外国人の日本人をよく理解できない理由である。このように表現を最小限で抑える習慣は、日本の詩にも見出される。世界中どこに行っても、三行の詩は存在しない。この三行があれば、詩人にも読者にも十分なのだ。日本人の心は滝のようにごうごう言わない。静かな湖水のようである…彼らは花や鳥や月を求めて叫ぶことをしない。それらのものと日本人とのつながりは、美を楽しむ中に存している。日本人は人を殴らない。ものを盗まない。そうしたことから人が生命を失うこともない。だから三行詩で事が足り、心の平和を乱すことがないのだ」<sup>16)</sup>と述べる。

「古池や / 蛙とびこむ / 水の音」を例に挙げたタゴールは、「詩人は古池の有様を、どのように心に浮べるべきかについて、美しいわずかな暗示を与える」と賞賛する。

この年、成瀬仁蔵はタゴールの来日を知り、日本女子大学に招いた。東京帝国大学の講演後、再び慶応義塾大学で講演を行っているがその際の論評はな



い。タゴールの来日からひと月が経ち、公式行事が落ち着いた時、タゴールは、日本女子大学の軽井沢寮で女子学生と木陰で語り合う日々を得た。この日本女子大学での語らいこそタゴールが望んでいた「人里離れたところでひっそりと暮らす」<sup>17)</sup> 日々の実現であったと述べられている。このタゴールの言葉は、タゴールが実践してきた「森の中の学校」の思想とも重なる。

現在も、日本女子大学の創立からの歴史において、タゴールの来校は大きな足跡として残るだけでなく、日本への来日において、タゴールが何を語り伝えたかということの記録としても重要である。

#### 4. 山室静のタゴール観

##### ①詩人として

山室はタゴールを評して、「名もない民衆の心をとらえるとともに、世界の第一流の文学者をも動かす力を持っている」<sup>18)</sup> - (その理由は) 万人の心に通じる普遍的な人間性の秘密をタゴールがつかみ、さらに遠く高い人類の願いを予告するものをもってゐるからではないのか」とする。

タゴール初期の頃、中期の作、頂点というべき時期の、『園丁』『果物つみ』『ギタンジャリ』の3つの詩にたいして、山室は、「青春の甘やかな調べと遠いあこがれが、次第に引きしまって熟し、ついには至高の存在者をたたえつつ、詩人が安らかにその胸に身をゆだねているのが、これだけからもよみとれはしないか」<sup>19)</sup> と述べる。ノーベル賞の対象となった詩だけでなく、山室が目にしたのは、タゴールの子どものための詩や童話についてである。

1914年に日本では、タゴールの幼児詩集『新月』が出された。この時期について山室は「児童のために詩を書くという考えは、いまだ東洋のどこにもなかった筈だ」<sup>20)</sup> と振り返る。1913年といえば、日本ではまだ「赤い鳥」の童謡運動も起きていないところで、この点でタゴールの功績は大きいと指摘する。『新月』の発行を受けて、中国ではタゴールの影響は強く見られるが、日本の童謡運動ではそのような状況には至らなかったようである。

タゴールの最愛の妻と次女を続けて亡くした後に書かれた「臨終」という詩には、山室はタゴールの人生観と児童文学を書く立場が示されていると指摘する。

「僕の行く時がきました。母さん、僕は行きますよ。/ さびしい夜明けの灰白い暗の中であなたが寢床の赤ちゃんを求めて腕をのばす時、僕は言います。/ 「赤ちゃんはそこにはいませんよ！」- 母さん、僕は行きますよ。/僕はやさしい風のそよぎになってあなたを抱きましょう。あなたが浴みなさる時、僕は水の上のさざ波になって幾度も幾度もあなたをキッスします (後略)」

ここには死の悲しみはあっても、死に対する不安や反抗はない。子どもはまるで故郷に帰るように死の国へ運ばれてゆき、風や草や笛の音など、つまり自然の万象の中にとけこむ。こうした感覚を、山室は明らかにインド的な輪廻転生の汎神論的世界観から来ているという<sup>21)</sup>。

山室は「それにしてもタゴールの描く子どもの世界の美しさは、どこからくるのだろうか」と述べる。それについての答えは、タゴールの詩に対してではなく、児童劇「郵便局」(日本の小山内薫によって上演)への評価の中で、「永遠の生命と真理の国へ招かれる趣きのみごとにシンボリックに描いている点は、俗事に捉われて何が人間にとって大切であるかを見失いがちな現代の大人と子供を問わず、その心を洗い浄めるものとして、やはり高い生命を持つだろう」<sup>22)</sup> としている。

##### ②小説家として

山室は、タゴールが汎神論的世界観でありながら、一方で現世への強い執着と愛につらぬかれた児童文学を生み出すことに疑問を投げかける。そもそも汎神論的世界観による生死一如の東洋的自然主義によって、インドには歴史思想が欠如しているが、そうした世界観の中では、西洋風のヒューマニズムの世界観は成立しないのだという。

山室は『カプールからきたくだもの売り』について、「もっとも強烈なヒューマニズムにつらぬかれた作」であり「異郷にさすらっている貧しい果物売りの故郷に残してきた子供への愛情を語って感動的だ。これはタゴールの全児童文学の中で最もすぐれたものと思う」<sup>23)</sup> とする。

この物語は、カプールから出稼ぎで果物(ドライフルーツ)を売りにやってきた大男が、裕福な作家の5歳の娘ミニーと友達になる。ある日、売掛金を踏み倒されて相手を殴った大男は、ミニーの目の前

で警察に逮捕され、牢獄に入れられる。8年もの歳月ののち、皆がすっかり忘れた頃に、物売りの男が牢獄から出てきて、ミニーに会いに作家の家を訪ねる。その日が結婚式だったミニーは、父である作家の言いつけによって花嫁衣裳のまま出てくるが、すぐにかくれてしまい、幼かった日々の二人の友情は戻らなかった。失意の物売りの様子を不審に思った父親は、物売りには故郷に残してきたミニーと同じ年頃の娘があることを知り、その気持ちを共有する。そこには貧富や身分の差はない。ただ同じ父親としての娘への愛があるだけなのである。

こうしたタゴールの物語について山室は「(タゴールの)小説は、それまで見捨てられていたインド生活の諸相を取上げて、新しい領域を開いたものであった」と評する。また作品『ゴーラ』では「新しいインドの目ざめと、そこに潜伏する困難で複雑な問題」<sup>24)</sup>を描いている、とする。

山室は、タゴールの全体的な文学性を次のようにまとめる。

「タゴール文学のもつ意味は、西洋的な個我の権威と権利の主張の上に立ってヒューマニズムに対して、その狭さと醜いエゴイズムを反省させ、無償の生命の戯れの美しさと、人間が神への帰入と個我へのある断念の上に立って、万物と平和な共存と調和の中に生きる可能性を開いてみせたことであると言えようか」<sup>25)</sup>と述べる。一方、先の童話や小説を通して、山室はタゴールが、外界のあらゆる些細な物の中にも美しい女神の姿を見、それを自分の内奥にも感じ、そうかと言って社会的悲慘を見ようとしなのではなく、そこに悲慘や残忍があらうと、全体としてのこの世界を愛し賛美することを辞めないと指摘する。そして「タゴールは終始肯定と愛の詩人であった」<sup>26)</sup>と評する。

### ③思想家として

詩や物語を対象とした評価でなく、タゴールの思想そのものについて、山室は次のようにまとめている。タゴールの愛国心というものは、少しも排他的で偏狭なナショナリズムがない、という。いくら愛する祖国のためであっても、それが単にインド伝来のものであるからとて尊重することはタゴールにはできなかったからだ。反対に、単に外国から入ってきたものだからとて価値あるものをも排斥することも、やはりできなかった<sup>27)</sup>。

この点は後に、ガンディーの指導下に非協同運動の波が高まった時に、ことにはっきりと現われた。ガンディーとの共通点と対立点については先に述べた通りであるが、タゴールが愛国運動を通じて何よりも大切にしていたのは、「澎湃として起ってきた民族独立の気運を導いて、単に熱狂的な愛国主義と敵への憎悪をぬけ出て、それを民族回生の積極的な倫理性をもつより高いものに転ぜしめることであった」<sup>28)</sup>のだと言う。その重視する点において、ガンディーとのズレが生じていた。

山室は、タゴールの甘美な抒情詩人としての面を認めつつ、彼の強い社会批判の側面を見る。「一八七五年に、彼は後に『インド国民会議』に発達した『ヒンズー・メラ』の会合で詩を朗読したが、それは当時の総督リットン卿が催した豪華な祝宴と対比して、インドの貧しい同胞の姿を描いた作だった。八一年にははじめてカルカッタ医学校の学生を前に講演したが、その演題は『シナにおける死の商人』というもので、はげしくイギリスの阿片政策を攻撃したものだったといわれる。彼の眼は、悲慘な祖国の同胞の上にだけでなく、広く隣邦の上にまで注がれていたのだ」<sup>29)</sup>と言う。

詩人としての活躍をしながら、国家への批判を断固として行ったタゴールの姿勢は、そのまま山室静の生き方と重なる。

タゴールは、ガンディーと異なり政治運動において、投獄や逮捕ということはなかったが、イギリスの政策への厳しい批判や反抗をしてきた。またインドに対しても無意味な伝統を継承することへの否定を行ってきた。インドにおいてタゴールは批判を口にすることで、逮捕など制裁は受けていないが、満州事変についての日本批判では、日本側からの黙殺という無言の制裁を受けている。

山室静もプロレタリア運動により、少なくとも3回逮捕・拘留されている。こうした、政治思想を貫いた山室の姿勢は、タゴールの生き方と無関係ではないだろう。

### ④教育者として

タゴールのサンチニケタンの林の中の学校は、1901年12月22日に始められた。

教師は5人、生徒も5人（うち一人はタゴールの長男）。タゴールは教育の仕事は国籍や信仰の差別を越えるものと信じていたため、生徒にも教師にも

身分差別を無視し、平等を心がけた。タゴールは「自然こそ最良の教師である」とした。彼は自然の中で子供の感覚を自由に開かせ、その好奇心をかきたててくことを、教育の出発点としたのである。音楽や絵画や詩が、彼の感受性と心情をやしない、知性を磨くことと並んで、心情を豊かにしなければ、本当の全人的人間になることはできないと考えたのである。

タゴールは自身の少年期の悲惨な学校体験から、人間は狭い自我に限られるものでなく、自分が豊かになれば、おのずとそれはより広い共同体を求めて溢れ出すと考えていた。それゆえ、教育は単に個人の独立と完成を目指すのではなく、社会への奉仕と協同への道につながるものでなくてはならない。こうした考えから、タゴールは生徒たちに至高の者への愛と尊敬を教えるとともに、学校が一つの自治的な小社会として運営されるように努力したのである。

山室静のタゴール観がもっとも明確に見てとれるのが、このタゴールの教育の在り方ではないだろうか。山室は「戦後私が柄にもなく信州小諸で若い人達を相手に、高原学舎という小さい塾のようなものを開いた由縁の一つにもタゴールがシャチニクタンShantiniketanの林の中でわずかの生徒を相手に学舎を開いたことが、意識せずして深く影を落としていた結果と思われる」<sup>30)</sup>と述べる。詩作による文学的影響だけでなく、学校の設立に至るというのは、タゴールと山室静の思想上の深い関わりを示す。

## 5. 長野一高原学舎（浅間国民高等学校）

山室は、疎開のため信州佐久に帰り、恩師の斡旋で県立野沢高等女学校の国語教師となる。この学校の女学生との関わりについては戦後20年経て編集した『16歳の兵器工場』<sup>31)</sup>に詳しい。戦争によって教育を受ける機会を奪われた学生たちに接したことで、戦争末期から、山室には農村の青年教育のための「私学校」の構想があった。山室はこの私学校の構想について、「愚劣な戦争のために追いつめられ心を碎かれた時…（中略）…受けた痛手をなめて医しながら、そこで最後の抵抗を試み、できるならば若干の新しい種をまくため」<sup>32)</sup>と書いている。

1945年、浅間国民高等学校の趣意書を配布、敗戦の翌春である1946年8月16日に開校。

東栄蔵は、この高原学舎設立の趣旨には地方に腰を据えて働いている青年に「文化的教養と農耕への

愛と農村にむすびついた技芸とを与えよう」<sup>33)</sup>とした山室の念願が込められているとしている。

入学生は、本科（中等学校卒）40名、専科（小学高等科卒）50名。科目において特徴的なのは、園芸・農業・畜産・時事などがあり、地域の殖産や農産に力を注いでいる点である。さらに哲学・倫理、生物・数学、英会話・時事とかなり高度な内容を備えていたようだ。特に、文学についての講義は充実していたようである。高原学舎の学生であった荒井武美は、当時のことを「（山室は）世界文学を講述されたが、特に印象に深かったのは、農村文学の講義であった。抱きかかえる程の書物を携えられてきて、終始机にうつむき加減に、まるで私話するような話し振りであった」<sup>34)</sup>と振り返る。

ちなみに国語教師は妻の美喜の担当で、『源氏物語』や『枕草子』など平安女流文学を講じ、生物担当の浦口真左はペンシルバニア大学で生物学を修め、その指導方法は路傍の植物にでも目を留めて説明をするというやり方だったという。ライ麦の収穫祭なども開催された。このあたりの方針は、デンマークの国民高等学校や、宮沢賢治が理想とした教育、タゴールがわずか数名の生徒を相手に行った森の学校に似ており、これらの教育が山室の理想だったのであろう。

高原学舎の生徒であった荒井武美によれば、新進と目された批評家や作家も来校したが、必ずしも文学的と言えるような雰囲気ではなく、高原学舎の掲げた全人的教育は、その主旨を労作教育に置き、文字通り晴耕雨読を目指していたという。また先の東栄蔵によれば、山室は自分の蔵書数百冊を学舎に備えて自由利用させたり、島崎藤村や阿部次郎らの文章を収めた『草上教室』という課外用の小冊子を編集したという<sup>35)</sup>。しかし、瞬く間に挫折の危機を迎える。

山室の理想とした教育が行われようとしていた高原学舎は、わずか1年半で閉校となる。理由は内外ともに複数あった。六・三・三制の学制改革を契機に、新入生が全く期待できなかったことと、急激なインフレの激化による回復不能な経営の悪化が、外的理由であった。内的理由としては、これだけ充実した高度なカリキュラムでありながら、学生たちにやる気がなかったということにある。在籍した学生の多くが、上級学校志望に落ちた学生や、戦後に行くあてのなかった者たちが多かったせいだという。



東によれば、山室が挙げた大きな理由は、高原学舎のような自由な私学に対して、信州の教育界が理解を欠く事大主義であったことだとする。

## おわりに

山室静のタゴールへの評価は、どのような時代の流れにあっても左右されることはなかった。山室はタゴールのノーベル文学賞受賞の如何にかかわらず、その詩に魅了され続けた。日本が戦争へと突き進む時代にタゴールが日本批判をしたことで、日本は、タゴールを黙殺するが、そうした状況下において詩集を訳し刊行することは、単なる文学性を評価するだけにとどまらない。日本において山室がいかに生きて来たかを示したことになるだろう。

山室自身の生き方に大きくタゴールが関わったといえ、山室が設立した高原学舎である。山室はタゴールのサンチニケタンの林の中の学校の理念を、戦後の混乱期の日本で実現しようとした。

山室はタゴール文学の意味を次のようにまとめる。「(タゴールの) 中核をなすものとして、ヨーロッパ風の自我の強調や民族主義や、その発展である機械文明を拝し、東洋的な汎神論に立つ自然への愛と、ある敬虔をもつ生命の讃美があることだけは言うてよいだろう」<sup>36)</sup>と。殊にタゴール童話については、汎神論的世界観とヒューマニズムの両方を持ったものだとして評した。山室静はタゴールの文学の中にある普遍的な「美」を捉えていた。そして、その「美」とは感情で捉えるだけでなく一つの思想として捉えていることに他ならないと、考えていたと言えるであろう。

## 〔要 約〕

山室静（1906-2000）の文学活動は多岐にわたる。山室静は、日本の近代文学への評論や英文の翻訳、北欧を中心とする神話の研究や翻訳活動、そして詩や小説の創作をしてきた。山室静のもう一つの文学活動に「タゴール研究」があげられる。山室はタゴールの伝記で、ヨーロッパ的なものを採り入れつつ、あくまで東洋・インドの伝統との結合をし、ヒューマニストとしての活動をした、と述べる。タゴールがノーベル文学賞を獲った際には、日本も一時期に賞賛した。しかし、タゴールは日本が大東亜共栄圏へと突き進んだことに対し、厳しい批判をするよう

になると、まったく黙殺されるようになる。そうした時期にあっても、山室はタゴール作品を紹介し、翻訳し、評価をやり続けた。この論文では、山室静のタゴール観について考えてみたい。

## 注

- 1) 鈴木千歳「タゴールの児童文学の日本への受容」、『野の風』第22号、2012年 pp.1-8.
- 2) 山室静『真理の旅人—20世紀を動かした人々』、講談社、1964年.
- 3) 山室静「タゴールの生涯」『世界文学への窓 山室静著作集5』、冬樹社、1972年、p.192.
- 4) 前掲3) pp.198-206.
- 5) 山室静『アンデルセンの生涯』、新潮選書.
- 6) 前掲3) p.206.
- 7) 前掲3) pp.226-227.
- 8) 前掲3) p.227.
- 9) 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、名古屋大学出版会、2012年、p.348.
- 10) 野口米次郎「タゴール」『野口米次郎選集第3集』、クレス出版、1998年、pp.332-333.
- 11) 岩野泡鳴「如何にタゴールを見る乎」『岩野泡鳴全集 第15巻』、臨川書店、1997年、1997年、pp.502-504.
- 12) 山室静「タゴールと児童文学」、『日本児童文学』9月号、1966年、pp.11-15.
- 13) 井上哲次郎「タゴール氏の講演について」『六合雑誌』、1916年7月号、p.28.
- 14) 丹羽京子『タゴール』、清水書院、2011年.
- 15) 山室静『カブールからきたくだもの売り』旺文社ジュニア図書館、1978年、p.157.
- 16) 前掲3) p.241.
- 17) 前掲4)、前掲3) pp.244-255.
- 18) 前掲3) p.190.
- 19) 前掲3) p.192.
- 20) 山室静「タゴールと児童文学」『日本児童文学』9月号、1966年、p.13.
- 21) 前掲20)
- 22) 前掲20) p.12.
- 23) 前掲20) pp.13-14.
- 24) 山室静「タゴールと私のかかわり」、『タゴール』月報第39号「人類の知的遺産」、1981年 p.3.
- 25) 前掲20) p.24.

- 26) 前掲 20) p24.
- 27) 前掲 3)
- 28) 前掲 3)
- 29) 前掲 3)
- 30) 前掲 24) pp.3-4.
- 31) 山室静『16 歳の兵器工場―長野県野沢高女勤  
労働員の手記』太平出版社, 1975 年.
- 32) 前掲 31)
- 33) 東栄蔵『「高原学舎」の精神と文芸誌「高原」  
の意義』, 『童話の森通信-特集・山室静の世界』  
vol.20, 2001 年.
- 34) 荒井武美『山室静とふるさと』草舎出版, 2006  
年.
- 35) 前掲 33)
- 36) 前掲 20) p4.

## 参考文献

- ・『タゴール著作集』全 8 巻, アポロン社, 1959 年.
- ・『タゴール著作集』全 12 巻, 第三文明者, 1981 年  
～ 1993 年.
- ・『山室静自選著作集』郷土出版, 1993 年.
- ・『山室静著作集』冬樹社, 1972-1973 年.
- ・大沼郁子.
- ・「山室静―仙台で過ごした 7 年間―」(『日月』9  
号 2012 年).
- ・「山室静の童話観―日本文学との関わりを中心  
に―」(『日月』10 号 2013 年).
- ・「山室静と北欧文学」(日本女子大家政学部紀要  
20 号 2014 年).
- ・「山室静と『ムーミン』」(『日月』12 号 2015 年).